

やんぬる哉

太宰治

青空文庫

こちら（津軽）へ来てから、昔の、小学校時代の友人が、ちよ
いちよい訪ねて来てくれる。私は小学校時代には、同級生たちの
間でいささか勢威を逞たくましゅうしていたところがあつたようで、

「何せ昔の親分だから」なんて、笑いながら言う町会議員なども
ある。同級生たちはもうみんな分別くさい顔の親父になつて、町
会議員やらお百姓さんやら校長先生やらになりすまし、どうやら
一財産こしらえた者みたいに落ちつき払っている。しかし、だん
だん話合つてみると、私の同級生は、たいいてい大酒飲みで、おま
けに女好きという事がわかり、互あきに呆れ、大笑いであつた。

小学校時代の友人とは、共に酒を飲んでも楽しいが、中学校時

代の友人とは逢^あつて話しても妙に窮屈だ。相手が、いやに気取っている。私を警戒しているようにさえ見える。そんなら何も私なんかと逢つてくれなくてもよさそうなものだが、この町の知識人としての一応の仁義と心得ているのか、わざわざ私に会見を申込む。

ついせんだつても、この町の病院に勤めている一医師から電話が掛つて来て、今晚粗飯を呈したいから遊びに來いとこの事であった。この医師は、私と中学校の同級生であつたと、かねがね私の親戚の者たちに言っているそうであるが、私にはその人と中学時代に遊んだ記憶はあまり無い。名前を聞いて、ぼんやりその人の顔を思い出す程度である。或^{ある}いは、彼は、私より一級上であつた

のが、三学年か四学年の時にいちど落第をして、それで私と同級生になったのではなかったかしら、とも私は思っている。どうも、そうだったような気もする。とにかく、その人と私とは、なじみ馴染が薄かった。

私はその人から晩ごはんのごちそうになるのはどうにも苦痛だったので、お昼ちよつと過ぎ、町はずれの彼の私宅にあやまりに行った。その日は日曜であつたのだらう、彼は、ドテラ姿で家に行った。

「ばんさんかい晩餐会は中止にして下さい。どうも、考えてみると、この物資不足の時に、僕なんかにごちそうするなんて、むだですよ。つまらないじやありませんか。」

「残念です。あいにく只今、細君も外出して、なに、すぐに帰る筈はずですがね、困りました。お電話を差し上げて、かえって失礼したようなものですね。」

私は往来に面した二階のヴェランダに通された。その日は、お天気がよかった。この地方に於いて、それがもう最後の秋晴れであつた。あとはもう、陰鬱な曇どん天てんつづきで木枯こがらしの風ばかり吹きすさぶ。

「実はね、」と医師はへんな微笑を浮かべ、「配給のリング酒が二本ありましてね、僕は飲まないのですが、君に一つ召上つていただいて、ゆっくり東京の空襲の話でも聞きたいと考えていたので。」

おおかた、そんなところだろうと思っていた。だから、こうして断りに来たのだ。リンゴ酒二本でそんなに「ゆつくり」つまりぬ社交のお世辞を話したり聞いたりして、窮屈きわまる思いをさせられてはかなわない。

「せっかくのリンゴ酒を、もったいない。」と私は言った。

「いいえ、そんな事はありません。どうせ僕は飲まないんですから。どうです、いま召し上りませんか。一本、栓せんを抜きましよう。」

まるで、シャンパンでも抜くような騒ぎで、私の制止も聞かず階下に降りて行き、すぐその一本、栓を抜いたやつをお盆ぼんに載せて持って来た。

「細君がいないので、せっかくおいで下さっても、何のおもてなしも出来ず、ほんの有り合せのものですが、でも、これはちよつと珍らしいものでしてね、おわかりですか、ナマズの蒲焼かばやきです。細君の創意工夫の独特の味が付いています。ナマズだつて、こうなると馬鹿に出来ませんよ。まあ、一口めし上つてごらんなさい。鰻うなぎと少しも変りませんから。」

お盆には、その蒲焼と、それから小さいお猪口ちよこしが載つていた。私はリング酒はたいてい大きいコップで飲む事にしている、こんな小さいお猪口で飲むのは、はじめての経験であつたが、ビール瓶のリング酒をいちいち小さいお猪口にお酌しやくされて飲むのは、甚はなはだ具合いの悪い感じのものである。のみならず、いささかも酔わ

ないものである。私はすすめられて、こここの奥さんの創意工夫に依るものだというナマズの蒲焼にも箸をつけた。

「いかがです。細君の発明ですよ。物資不足を補って余りあり、と僕はいつもほめてやっているのだが、じっさい、鰻とちつとも変りが無いのですからね。」

私はそれを嚙下して首肯し、この医師は以前どんな鰻を食べたのだろうといぶかった。

「台所の科学ですよ。料理も一種の科学ですからね。こんな物資不足の折には、細君の発明力は、国家の運命を左右すると、いや冗談でなく、僕は信じているのです。そうそう、君の小説にもそんなのがあったね。僕はいまの人の小説はあまり読まない事にし

ているので、君の小説もたった一つしか拝見した事はないのだが、何でも、新型の飛行機を発明してそれに載って田圃に落ちたとかいう発明の苦心談、あれは面白かった。」

私はやはり黙って首肯した。しかし、そんな小説を書いた覚えは、私にはさらに無かった。

「とにかく、日本もこれから、新しい発明をしなければ駄目ですよ。男も女も、力を合せて、新しい発明を心掛けるべき時だと思っっています。じっさい、うちの細君などは、まあ僕の口から言うのはおかしいですけど、その点は、感心なものです。何かと新しい創意工夫をするのです。おかげで僕なんかは、こんな時代でも衣食住に於いて何の不自由も感じないで暮して来ましたからね。

物が足りない物が足りないと言つて、闇の買いあさりにきようほん狂奔
している人たちは、要するに、工夫が足りないのです。研究心が
無いのです。このお隣りの畳屋にも東京から疎開して来ている家
族がおりますけれども、その細君がこないだうちへやって来て、
うちの細君と論戦しているのを私は陰で聞いて、いや、面白かつ
たですよ。疎開人にはまた疎開人としての言いぶんがあるらしい
んですね。その細君の言うには、田舎のお百姓さんが純朴だとか
何とか、とんでもない話だ、お百姓さんほど恐ろしいものは無い。
純朴な田舎の人たちに都会の成金どもがやたらに札びらを切つて
見せて墮落させたなんて言うけれども、それは、あべこべでしょ
う。都会から疎開して来た人はたいがい焼け出されの組で、それ

はもう焼かれてみなければわからないもので、ずいぶんの損害を受けているのです。それがまあ多少のゆかりをたよつて田舎へ逃げて来て、何も悪い事をして逃げて来たわけでもないのに肩身を狭くして、何事も忍び、少しずつでも再出発の準備をしようと思つているのに、田舎の人たちは薄情なものです。私たちだつて、ただでものを食べさせていただけこうとは思つていません、畑の仕事でも何でも、うんと手伝わせてもらおうと思つているのに、そのお手伝いも迷惑、ただもう、ごくつぶし扱いにして相談にも何も乗つてくれないし、仕事がないからよけいも無い貯金をおろして、お手伝いも出来ぬひけめから、少し奮発してお礼に差出すと、それがまた気にいらぬらしく、都会の成金どもが闇値段を

吊り上げて田舎の平和を乱すなんておっしゃる。それでいてお金を絶対に取らないのかというと、どうしてどうして、どんなに差上げてても多すぎるとは言わない。お金をずいぶん欲しがっているくせに、わざとぞんざいに扱ってみせて、こんなものは紙屑かみくず同然だとおっしゃる、罰ばちが当りますよ、どんなお札にだって菊の御紋が付いているんですよ、でもまあ、そうしてお金だけで事をすましてくれるお百姓さんはまだいいほうで、たいていは、お金とそれから品物を望みます。焼け出されのほとんど着のみ着のままの私たちに向って、お前さまのそのモンペでも、などと平気で言うお百姓さんもあるのですからね、ぞつとしますよ、そんなにまでして私たちからいろいろなものを取り上げながら、あいつらも

今はお金のあるにまかせて、いい気になって札びらを切って寝食
いをしてしているけれども、もうすぐお金も無くなるだろうし、そう
なった時には一体どうする気だろう、あさはかなものだ、なんて
私たちをいい笑い物にしているのです。私たちは以前あの人たち
に何か悪い事でもして来たのでしょうか、どうして私たちにこん
なに意地悪をするのです。田舎の人が純朴だの何だの、冗談じゃ
ありません、とこうまあいったような事をお隣りに疎開して来て
いる細君が、うちの細君に向ってまくし立てたのです。これに対
して、うちの細君はこういう答弁を与えました。それは結局、あ
なた自身に創意と工夫が無いからだ、いまさら誰をうらむわけに
はいかない、東京が空襲で焼かれるだろうという事は、ずいぶん

前からわかっていたのだから、焼かれる前に何かしらうまい工夫があつて然るべきであつた。たとえば今から五年前に都会の生活に見切りをつけて、田舎に根をおろした生活をはじめていたら、あまりお困りの事は無かつた筈だ。愚図々々と都会生活の安逸にひたつていたのが失敗の基である、その点やはりあなたがたにも罪はある、それにまた、罹災した人たちはよく、焼け出されの丸はだかだの、着のみ着のままだのと言うけれども、あれはまことに聞きぐるしい。同情の押売りのようにさえ聞える。政府はただちに罹災者に対してお見舞いを差上げている筈だし、公債や保険やらをも簡単にお金にかえてあげているようだ。それに、全く文字どおりの着のみ着のままという罹災者は一人も無く、まずたい

ていは荷物の四個や五個はどこかに疎開させていて、当分の衣料その他に不自由は無いものの如く（こと）に見受けられる。それだけのお金や品物が残っていたら、なに、あとはその人の創意工夫で、なんとかやって行けるものだ、田舎のお百姓さんたちにたよらず、立派に自力で更生の道を切りひらいて行くべきだと思う。ところがまあ謂いわば正論を以もつて一矢報いっしいてやったのですね、そうすると、そのお隣りの細君が泣き出しましてね、私たちは何もいまままで東京で遊んでいたわけじゃない、ひどい苦勞をして来たんだ、とか何とか、まあ愚痴ぐちです、涙まじりにくどくどと言って、うちの細君の創意工夫のアメリカソバをごちそうになって帰りましたが、どうも、あの疎開者というものは自分で自分をみじめにしていま

すね、おや、お帰りですか、まだよろしいじやありませんか、リ
ンゴ酒をさあどうぞ、まだだいぶ残っています、これ一本だけで
もどうか召し上ってしまつて下さい。僕はどうせ飲まないのです
から、そうですか、どうしてもお帰りになりますか、ざんねんで
すね。うちの細君も、もう帰つて来る頃ですから、ゆつくり、東
京の空襲の話でも。」

私にはその時突然、東京の荻窪おぎくぼあたりのヤキトリ屋台が、胸
の焼き焦こげるほど懐しく思い出され、なんにも要らない、あんな
屋台で一串二銭のヤキトリと一杯十銭のウイスケというものを前
にして思うさま、世の俗物どもを大声で罵倒ばとうしたいと渴望かつぼうした。
しかし、それは出来ない。私は微笑して立ち上り、お礼とそれか

らお世辞を言った。

「いい奥さんを持つて仕合せです。」往来を、大きなカボチャを三つ荒縄でくくつて背負い、汗だくで歩いているおかみさんがあゝる。私はそれを指さして、「たいていは、あんなひどいものなんですからね。創意も工夫もありやしない。」医師は、妙な顔をして、ええ、と言った。はつと思うまもなく、その女は、医師の家の勝手口にはいった。やんぬる哉^{かな}。それが、すなわち、細君御帰宅。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成1）年4月25日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：ゆづり

2000年3月21日公開

2005年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

やんぬる哉

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>